

3月8日、9日の両日、2013年度の「春インカレ」が開催された。別ページに掲載されたような結果となったこのインカレは、併設大会に出走しながら観戦した道場主の目にどのように映ったのだろうか。

## 1年前の記憶

2013年3月。インカレのリレー、男子選手権クラスでは息詰まる優勝争いの末、4連覇を狙う東大を破った東北大が6年ぶりに頂点に立ちました。

筆者は、それ以前のインカレでも「接戦」や「僅差の決着」を数多く観て来ました。でも、その日は「個人戦でも全国上位を競う3人で固めた大学同士」が、「1走から3走までのほぼ全区間、先頭の位置に接近した状態」で、「誰もが大きく崩れることなく、力を出し切った末」に、「最後までギリギリの勝負を全うした」のを目の当たりにし、自身のインカレ観戦経験で最高と言って良い感動を覚えました。個人的に、この東北大と東大の優勝争いのことを「日光所野の美しき試合」と呼んで、語り継ごうと決めています。

昨年ほどの名勝負は2年続かないとしても、今年もインカレでは、何らかの貴重な場面が見られるはず。そのことは確信できました。もちろん、リレーだけではなく、初日のミドルの観戦も楽しみでしたし、選手の戦いぶりの他、コースにも関心が向いていました。ミドルとリレーで、どのようにトレインを使い分けることだろう。果たして運営者はどれだけ「現代的」な競技環境を用意することか。前回も触れた「競技形式の概念」を念頭に置きながら、会場に赴きました。

ということで、前回に引き続き、各種目（競技形式）のコンセプトを、日本オリエンテーリング協会の「競技規則および関連規則ガイドライン」の付表を転載します。

（この表は、日本オリエンテーリング協会のWEBサイト上でも確認できます。）

## 意外な僅差

自分自身の併設コースでの競技を終え、観戦の時間に入りました。放送で伝えられる中間計時情報から、A決勝は期待通りの良い勝負になっていると感じられました。併設コースを走ってみて「難しく組もうとすればかなり難しくなるトレイン」と思ったので、少し心配もありましたが、杞憂でした。中

には力を出し切れず、失敗している選手もいるようでしたが、荒れに荒れた泥仕合にはなっていないようでした。

「観戦していて面白いのは、テンポ良く選手が現れること。自分が走るわけではないし、コースは多少簡単でも良い。タイム更新が頻繁な方が盛り上がる」といった声も挙がっていました。

ミドルの設定コンセプトからすれば、「簡単」では良くないのかもかもしれませんが、イベントとしての盛り上がりを考えると、（そして、それがオリエンテーリング界の外へ訴える上でも大事な要因であると思うと、）頷ける意見です。筆者もこの時点では、てっきり易しめのコースが提供されたと考えていました。

結局、男子は東北大学3年・杉村俊輔選手、女子は立教大学2年・宮川早穂選手と、男女とも「全日本ミドル選手権者」が優勝。「日本一」の座から遅れること4ヶ月で「日本一の学生」の座に就きました。この結果を見て、「易しめのコースでも、力のある選手が勝つ」「易しめのコースだったから、ワンミスに乗り切れなかった上位候補者もいたのだろう」と考えた記憶があります。

ところが。翌日地図を購入してみて、「コースは決して易しくなかった。ミドル日本一学生決定戦にふさわしく、

付表2 オリエンテーリング競技形式の概念と基準

競技形式	ロングディスタンス競技	ミドルディスタンス競技	スプリント競技	リレー競技
コントロール	技術的に難度の高いものを含む	一貫して技術的に難度が高い	技術的に容易	技術的に難度の高いものを含む
ルート選択	広域のルート選択を含む重大なルート選択	中小程度のルート選択	難しいルート選択で、高い集中力を要求	中小程度のルート選択
走行タイプ	体力を要求。持久力とペース配分の判断力を要求	高速度であるが、トレインの複雑性への対応を要求	非常に高速度	高速度。同一のコントロールかどうかわからない他の競技者との接近
トレイン	良いルート選択が可能で体力的にタフなトレイン	技術的に複雑なトレイン	非常に走りやすい公園、街路、森林	いくつかのルート選択が可能で、適度に複雑なトレイン
地図	1:15,000 [JSOM]	1:10,000(1:15,000) [JSOM]	1:4,000 または 1:5,000 [JSSOM]	1:10,000(1:15,000) [JSOM]
スタート間隔	Eクラス 2分以上 Eクラス以外 1分	Eクラス 2分以上 Eクラス以外 1分	1分	マス(一斉)スタート
優勝設定時間 (Eクラス)	M21E 90分 W21E 75分	M21E 25~35分 W21E 25~35分	ME 12~15分 WE 12~15分	ME 135分(3人) WE 120分(3人)
まとめ	オリエンテーリングのすべての技術とともに走力と体力が試される。	適度な時間にわたって、速く正確なオリエンテーリングが要求される。小さなミスが致命的となる。	速く見やすくわかりやすいオリエンテーリングである。多くの観客の前で行う見せるオリエンテーリングである。	3人の走者からなるチーム競技で、接戦を基本とする競技である。観客にとっても競技者にとってもエキサイティングである。

IOF 競技規則 Competition Formats に準じる。

男子…A 決勝出走者 54 人

優勝 杉村俊輔選手 32 分 00 秒

杉村選手の 5%増し(105%)のタイムは 33 分 36 秒 このタイムだと 6 位相当

杉村選手の 1 割増し(110%)のタイムは 35 分 12 秒 このタイムだと 10 位相当

杉村選手の 2 割増し(120%)のタイムは 38 分 24 秒 このタイムだと 25 位相当

杉村選手の 3 割増し(130%)のタイムは 41 分 36 秒 このタイムだと 36 位相当

杉村選手の 4 割増し(140%)のタイムは 44 分 48 秒 このタイムだと 44 位相当

杉村選手の 5 割増し(150%)のタイムは 48 分 00 秒 このタイムだと 47 位相当

女子…A 決勝出走者 24 人

優勝 宮川早穂選手 31 分 50 秒

宮川選手の 5%増し(105%)のタイムは 33 分 25 秒 このタイムだと 3 位相当

宮川選手の 1 割増し(110%)のタイムは 35 分 01 秒 このタイムだと 6 位相当

宮川選手の 2 割増し(120%)のタイムは 38 分 12 秒 このタイムだと 8 位相当

宮川選手の 3 割増し(130%)のタイムは 41 分 23 秒 このタイムだと 12 位相当

宮川選手の 4 割増し(140%)のタイムは 44 分 34 秒 このタイムだと 16 位相当

宮川選手の 5 割増し(150%)のタイムは 47 分 45 秒 このタイムだと 18 位相当

全日本ミドルのコースにしても良さそうな難しさだった」ことが分かりました。学生上位者の基礎力が年々上がっていること、近隣のトレインや類似のトレインで準備する機会が得られれば、皆きちんと対応してくることを再認識しました。

参考までに、今年のインカレミドル A 決勝レースで、上位者とのタイム比がどのぐらいであればどのぐらいの順位が取れたか、確認してみます。(上)

非常に大雑把に言えば、男子の場合は 1%タイムが増すと、女子の場合は 2~3%タイムが増すと、順位が一つ下がる、という状況が示されています。

現代の「学生トップレベル」は、そのまま「日本のトップレベル」です。将来のインカレで上位を目指す学生の皆さんは、他大学の学生が参加しないレースでも、同じクラスに日本代表級の選手がいるなら、彼ら・彼女らのタイムを参考に比較、自己分析し、課題を明確化して今後のインカレに臨んで欲しいと思います。

## 意外な大差

リレーの日。この時点ではまだミドル決勝のコースを知らないながらも、前日の様子から、今年も名勝負となる予感がしていました。しかし。

随所でライバルチーム同士の接近、鏑の削り合いが見られたものの、予想より差が付いた部分も多かったように感じられました。「昨日よりコースはシンプル、イージーなはずだが…」と想定して観ていましたから、残念な気もしました。

購入したコース図、全コントロール図をチェックしてみて、差が付いたことには納得できました。「3 人の走者か

らなるチーム競技で、接戦を基本とする」というリレーのコンセプト、競技者は学生であることを考えると、率直に「要求が高く、難しいコース」と思えました。ただ、昨年の優勝争いの記憶と、前日のミドルの結果からは、あのコースでの学生同士の接戦を期待したとしても、「尤も」ではあったでしょう。特に、前日のミドルのコースを知っており、そのコースを学生たちがきっちり走り切ったことを確認している運営陣は、大いに期待していたのではないのでしょうか。

筆者はいろいろな場所で繰り返していますが、「リレーはコースへの対応以上に、シチュエーションへの対応が重要な種目」です。この連載でも「リレーとはどのような種目か、徹底的に探るために、リレーの特徴を思い付く限り挙げてみよう」と勧め、実際に学生クラブの合宿のミーティングで出た意見を列挙したことがあります。

その中に、「リレーの大会は、少ない」という意見がありました。その意見を聞いて印象に残ったというコーチの一人が、「リレーを意識した練習はいろいろあるが、前走者をソワソワしながら待つ、といったことなど、大会でない経験できないことも確かに多い。だから、リレーの大会にはできるだけ出たいし、たまには大会のように本格的なリレーをする練習をしても良い」とアドバイスしていました。

ミドルのところで記した「近隣のトレインや類似のトレインで準備する機会が得られれば、皆きちんと対応してくる」という話と共通していて、つまりは「慣れていることはできるし、慣れていないことはできない」のです。

今後のインカレリレーで「接戦を勝ち抜きたい」と考えている学生の皆さ

んには、上記のアドバイスの重みを、是非感じ取って欲しいと思います。

## 19 年前の記憶

余談ですが、筆者自身も学生時代、インカレのリレーで慣れない状況（アンカーで、1 位でタッチを受けての出走。準備段階では専ら「逆転して優勝」という場面を想定していた）で走り、失敗しています。そうした経験もインブットし続けながらリレーの大会に臨んでいる内に、クラブカップリレーのアンカーとしての逃げ切り優勝と逆転優勝、全日本リレーの 2 連覇など、多くの好結果と、個人戦で勝った時とはまた異なる快感を得ることもできました。

インカレでの筆者の走りは、当時観ていた人にとっては「大逆転負け」にしか見えなかったと思いますが、本人は「5 位まで落ちた順位を 3 位まで戻した」というもう一つの逆転があったことを知っています。そして、だからこそ「自分はどんな時でも粘れる」と思えます。

「インカレで全てを出し切る」という思いも大事ですし、今、実際に虚脱感に満たされている学生の、そして卒業生の方も多いでしょう。そうした方たちには、「インカレの後にも成長できる。そして、オリエンテーリングはいつでも魅力的だ」ということを、あらためてお伝えしたいと思います。

(松澤俊行)

### 松澤俊行プロフィール

1972 年 9 月 19 日生。静岡県浜松市在住。競技者として、指導者として、運営者として、日々オリエンテーリングの魅力を感じ、伝える活動を続けている。